

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380845

研究課題名(和文) 社会的行動や社会的判断の自動性のメカニズムの解明 - 自己表象の変容の役割 -

研究課題名(英文) Mechanisms for automaticity in social behaviors and judgements: The roles of changes in representations of self, others, and circumstances.

研究代表者

沼崎 誠 (Numazaki, Makoto)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：10228273

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、社会的行動や社会的判断の自動性における、自己や他者や環境の表象の変容の役割を明らかにすることであった。3つの領域 - プライム - 行動リンク、身体化研究、マインドセット - で、プライミングの効果を実証的に検討した。1) 概念閾下プライミングが自己の表象と行動を変化させること、2) 概念プライミングや目標プライミングが自己注目によって調整されること、3) 自己の状態を変化させる身体性プライミングによって社会的判断が変化すること、4) マインドセットプライミングによって環境認知の変化と行動の変容が生じること、が示された。最後に、社会的行動や社会的判断の自動性を説明するモデルを検討した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project was to clarify the roles of representations of self, others, and circumstances in automaticity of social behaviors and social judgements. We conducted a series of experiments to examine priming effects in three areas: prime-behavior link, embodiment, and mindset priming. Main findings were as follows: 1) subliminal priming of concepts changed both self-representations and behaviors, 2) self-attention moderated the priming effects of concepts and goals on social behaviors and judgements, 3) embodiment priming, that changed self-states, influenced social behaviors and judgements, and 4) mindset priming changed cognitions of circumstances and social behaviors. We discussed the model of automaticity that could explain these findings.

研究分野：社会心理学

キーワード：社会心理学 行動の自動性 自己 プライミング マインドセット 身体性

1. 研究開始当初の背景

実験社会心理学においては、環境内の刺激や身体内の刺激によって無意識のうちに生じる社会的行動や社会的判断が注目され、社会的行動や判断の自動性として、多くの実証研究が行われてきた。その中で、これまでは意識の介在が必要とみなされていた多くの社会的行動や判断が自動的に生じることが示されてきた。閾下で呈示されたプライムが自動的に行動を生み出す(プライム-行動リンク研究)、身体的な感覚や動作や姿勢が無意識のうちにその後の判断に影響を与える(身体化研究)、先行する行動がその後の無関連な状況における行動や判断に無意識のうちに影響を与える(マインドセット研究)、ことが多くの実証研究で示されている。近年になるまでは、これらの自動的行動や判断が生じるメカニズムについては、必ずしも実証的な検討の対象となっていなかった。しかし、近年になって、これらの自動的行動や判断が生じるメカニズムにも注意が払われるようになり、複数のメカニズムが関わるようになってきている。これらの先行研究を踏まえ、本研究を計画するに至った。

2. 研究の目的

社会的行動や判断の自動性における自己、他者、および環境の表象の変容の役割を明らかにする一連の実証研究をおこなうことにより、自動性のメカニズムを解明する。

本研究においては、申請者が研究蓄積を持つ、(1) プライム-行動リンク、(2) 身体化研究、(3) マインドセット、の3つの社会的行動や判断の自動性の研究領域を取り上げて、これらの効果において自己表象や他者表象や環境表象の変容がどのような役割を果たしているかを検討する。従来の研究で取られていた行動や判断の指標に加えて、自己表象を主に潜在指標で測定し、媒介分析により自己表象の変化が媒介しているか否かを実証的に検討する。また、自己注目が高まると、自己表象の変化が行動や判断に影響を与えやすくなると考えられるため、自己注目の操作によって自動性の効果が強化されるか否かを検討する。さらに、他者表象や環境表象が自動性の効果に関してどのような役割を果たしているかを明らかにするための研究をおこなう。これらの実証研究を通して、社会的行動や判断の自動性のメカニズムにおける自己・他者・環境の表象の役割を検討し、理論的検討からモデルを構築する。

3. 研究の方法

文献研究をおこなった後、主に実験を用いて実証的な検討をおこなった。具体的手続きは、研究成果とあわせて記述する。

4. 研究成果

(1) プライム-行動リンク

異性愛の閾下プライミング研究

男性において恋人概念の閾下プライミングが、伝統的男性ステレオタイプに基づき自己ステレオタイプ化を引き起こすか、また、伝統的男性ステレオタイプに合致した行動を生み出すかを検討した。

実験1では、恋人概念の閾下プライミングが、自己または他者をプライムしたときの、身体的力強さ特性および性格の力強さ特性に対する語彙判断課題の反応時間に及ぼす効果を検討した。身体的力強さか性格的力強さとは無関係に、統制条件に比べ恋人概念を閾下プライムすると、自己が先行プライムされたときのみ反応時間が促進していた。この結果は、恋人概念の活性化により、表象において自己と力強さ特性が連合する自己ステレオタイプ化が生じることを示している。

実験2では、恋人概念の閾下プライミングが、自己ステレオタイプ化と身体的力強さ行動(握力)に及ぼす効果を検討した。結果として、恋人概念を閾下プライムすると、握力を強く示した。また、自己が先行プライムされたときのみ、身体的力強さ特性に対する語彙判断課題の反応時間が促進していた。この結果は、身体的力強さ行動を示す状況では、表象において、性格的力強さ特性ではなく身体的な力強さ特性においてのみ自己と連合する自己ステレオタイプ化が生じることを示している。しかし、恋人概念の閾下プライムが身体的力強さ行動に及ぼす効果は、自己ステレオタイプ化によって媒介されるという証拠は得られなかった。

実験3では、恋人概念の閾下プライミングが、自己ステレオタイプ化と性格的力強さ行動(決断力)に及ぼす効果を検討した。決断力としては曖昧な好みの選択肢に対する反応時間を測定した。結果として、性役割観の個人差が見られ、伝統的性役割観を持つ参加者でのみ、統制条件に比べて恋人プライム条件で、決断が速くなった。自己ステレオタイプ化においては仮説を支持する結果は得られなかった。

一連の研究結果は、恋人概念が活性化すると、自己表象が伝統的性ステレオタイプに合致する方向に変化し、伝統的性役割に合致する行動が自動的に出現することを示している(伝統的性役割観を持つ参加者により顕著)。しかし、自己表象の変化がこの効果を媒介するかに関しては明確な証拠が得られず、自己表象の変化が媒介すると考えるよりも、自己表象や行動準備状態表象といった様々な表象が、外界からの刺激に対してある特定のパターンに収斂するモデルの方が妥当である可能性を示している。

目標・概念プライミング研究

A. 達成目標が遂行に及ぼす効果の調整要因
達成目標のプライミングが遂行に及ぼす効果を自己注目が調整するかを検討した。乱文構成課題によって、達成関連語(vs. 統制)をプライムした。また、同様に自己(vs. 他者)注目を操作した。従属変数としては、100

マス計算の遂行を測定した。結果として、達成動機の低い参加者においてのみ、自己注目が高まった状態で達成目標をプライムされるときに他の条件に比べて、遂行が高まるという結果が得られた。この結果は、目標概念の活性化の効果が、自己注目という状況要因によって調整されることを示唆する。

B. 敵意概念の闕下プライムが対人認知に及ぼす効果の調整要因

敵意概念の闕下プライミングが他者の印象形成に及ぼす効果が、首の上下/左右の動きによって調整されるかを検討した。敵意概念を闕下プライミングして、敵意的かどうか曖昧な人物の情報をヘッドフォンで聞かせ印象を形成させた。印象形成の際に、半数の参加者には首を上下に、残りの半数の参加者には首を左右に振らせていた。結果として、私的自己意識の個人差の調整効果が見られ、私的自己意識の低い参加者では、首を横に振るときに敵意概念の闕下プライミングが敵意的であるという印象形成を促進した。一方、私的自己意識の高い参加者では、首を縦に振るときに敵意概念の闕下プライミングが敵意的であるという印象形成を促進した。この結果は、自己の内面への注目の高い人においてのみ、首の動きによって自己の内面の思考が妥当化され、プライミング効果が強くなることを示唆する（首の動きの自己妥当化効果）。一方、自己の内面への注目が低い人では、首の動き（上下：肯定的、左右：否定的）という単純な手がかりによって印象が変化し、プライミング効果に加算的な効果を生み出すことを示唆する（首の動きの単純手がかり効果）。つまり、首の動きという身体性の効果が、参加者の自己注目の程度によって異なった効果を生み出す可能性を示唆する。

(2)身体性研究

皮膚感覚

持つものの柔らかさ-硬さによって生じる皮膚感覚が対人認知と自己認知に及ぼす効果を検討した。身体的温かさが性格的温かさと連合して表象していることを示す研究と Harlow (1958) の研究から、柔らかさ-硬さ感覚が性格的温かさ-冷たさと連合して表象されていると予測した。女性的ポジティブ特性、女性的ネガティブ特性、男性的ポジティブ特性、男性的ネガティブ特性の自己評定をあらかじめ回答していた女子大学生が実験に参加した。参加者は、対人認知課題及び自己認知課題を行う間、柔らかい軟式テニスボールか硬い針金のボールを握り続けるように教示された。結果として、他者認知では、柔らかいボールを持った参加者は硬いボールを持った参加者に比べ、刺激人物が女性的ポジティブ特性を持っていると評定し、刺激人物に好意を示した。一方、自己認知では、柔らかいボールを持った参加者は硬いボールを持った参加者に比べて、男性的ネガティブ特性を持っていると評定するようになった。これらの結果は、持つものの柔らかさ-

硬さによって生じる皮膚感覚が、対人認知と自己認知に対して、それぞれ異なった影響を与えることを示唆する。

勢力姿勢

A. 勢力姿勢が顕在的・潜在的自尊心に及ぼす効果の調整要因 - 目の存在 -

勢力姿勢が顕在的・潜在的自尊心に及ぼす効果が、他者から見られていることを示唆する手がかりによって調整されるかを検討した。勢力を示す姿勢として、上を向く姿勢か下を向く姿勢かを参加者に取らせた。

実験 1 では、勢力姿勢をとらせたときに、参加者と同じ高さにあるディスプレイに呈示される画像により他者から見られているかの手がかりの有無を操作した。結果として、顕在的自尊心では効果は見られなかったが、潜在的自尊心においては特性顕在自尊心の調整効果を含め効果が見られた。特性顕在自尊心の高い参加者で他者からの視線を示す手がかりがあったときにのみ、高勢力姿勢は低勢力姿勢に比べて、潜在自尊心が高くなることが示された。この結果は、他者から観察される時に姿勢の効果が強まるという先行研究の結果が、個人差によって調整されることを示唆する結果である。

実験 2 では、勢力姿勢（上を向く姿勢 vs. 下を向く姿勢）をとらせたときに、その視線の先に他者から見られているかの手がかりである目の画像の有無を操作し、顕在的自尊心と潜在的自尊心を測定した。参加者の視線の先に目の手がかりがあると、上を見る姿勢では見下ろされているという状況であるため、他者から見られている手がかりが勢力姿勢の効果を弱める、または、逆転させるという仮説を設けた。結果として、潜在的自尊心では効果は見られなかったが顕在的自尊心では仮説を支持する結果が得られた。目があるときには、上を向く姿勢の時には下を向く姿勢のときに比べて、顕在的自尊心が低いという効果が見られた。一方、目がないときには上を向く姿勢と下を向く姿勢では差が見られなかった。

実験 3 では、実験 2 と同様の操作を行い、自分の判断への自信を従属変数にして検討した。結果として、実験 2 に対応する結果が得られた。目がないときには、上を見る姿勢の時には下を見る姿勢に比べて、判断が極端になりその判断に対する自信が高かった。一方、目があるときには、上を向く姿勢の時には下を向く姿勢のときに比べて、自分の判断が中庸になり判断への自信が低かった。

これら一連の研究結果は、他者から見られているかいないかという手がかり、そして、その手がかりの位置によって、姿勢が自尊心に及ぼす効果が調整されることを示唆している。実験 1 では潜在的自尊心でのみ効果が得られ、実験 2 では顕在的自尊心でのみ効果が得られた点についてはさらなる検証が必要であろう。

B. 勢力姿勢が女性の顕在的・潜在的自尊心に及ぼす効果の調整要因 - 性役割観の個人差 -

勢力姿勢が女性の顕在的自尊心・潜在的自尊心に及ぼす効果が状況要因や個人差要因によって調整されるかを検討した。勢力姿勢が自尊心に及ぼす影響が、異性愛が顕現化すると低下する効果が見られ、この効果は伝統的性役割観の高い(慈愛的偏見が強い)女性において顕著であろうという仮説を設けて検討した。あらかじめ慈愛的偏見尺度に回答させてあった参加者に、高勢力姿勢(vs. 低勢力姿勢)を取らせ、単語記憶課題によって異性愛を顕現化させた上で、顕在的自尊心(質問紙)および潜在的自尊心(IAT)を測定した。結果として、潜在的自尊心においては、伝統的異性愛システムへの支持が低い参加者では、高地位姿勢をとると低地位姿勢をとった時に比べて、先行研究と同様に有意に潜在的自尊心が高かった。一方で、伝統的異性愛システムを支持する参加者においては、高地位姿勢をとると低地位姿勢をとったときに比べて、先行研究とは異なり有意に潜在的自尊心が低かった。この結果は、勢力姿勢が自尊心に及ぼす効果が、性役割観の個人差によって調整されることを示唆するものである。一方、顕在的自尊心では、伝統的性役割観への支持が低い参加者では、高地位姿勢をとると低地位姿勢をとったときに比べて、顕在的自尊心が低かった。一方、伝統的性役割観を指示する参加者では、高地位姿勢と低地位姿勢の間に有意な差は見られなかった。この結果は、仮説とは逆の結果であった。顕在的自尊心と潜在的自尊心では逆の結果が見られたことは興味深いものではあるが、その理由は明らかではなく今後の検討が必要であろう。また、異性愛の顕現化の効果は観察されなかった。この点に関しては長期的配偶の顕現化と短期的配偶を区別して操作した上で、再度検討する必要がある。

接近・回避動作

A. 対象への接近・回避動作がその対象に関連する自己認知と態度に及ぼす影響

仕事や家庭に関連する事物への接近・回避動作を反復することによって、自己と仕事や家庭の連合強度(潜在的自己認知)および顕在的な性役割態度が影響を受けるかについて検討した。家庭に接近し、仕事を回避する動作をとった場合(家庭接近条件)は、その逆の動作をとった場合(仕事接近条件)に比べ、自己と家庭の連合が強まる(あるいは自己と仕事の連合が弱まる)だろうと予測した(仮説1)。性役割態度への影響については、男性参加者では家庭接近条件において、女性参加者では仕事接近条件において、性役割態度がより平等主義的になるだろうと予測した(仮説2)。平等主義的性役割態度尺度(SESRA-S)を含む質問紙に参加者に回答させ、接近・回避を操作する課題に取り組みさせた。仕事接近条件では、パソコン画面上に仕

事関連語が表示された場合にはレバーを手前に(接近動作)、家庭関連語が表示された場合にはレバーを奥に(回避動作)倒させた。家庭接近条件ではその逆であり、各条件とも200試行行われた。その後、仕事・家庭に関する潜在的自己認知をIATにより測定し、再度SESRA-Sに回答させた。結果として、潜在的自己認知においては、参加者の性別にかかわらず、仕事よりも家庭を自己と結びつける傾向が仕事接近条件よりも家庭接近条件において強くなっていた。この結果は仮説1を支持するものであり、接近・回避の身体動作によって接近対象の概念と自己の連合が強まるよう潜在的自己認知が影響を受けることを示唆している。一方、性役割態度においては、男性参加者では家庭接近条件のほうが仕事接近条件よりも性役割態度が平等主義的に変化していた。しかし、女性参加者においては、効果は明確には見られなかった。これらの結果は仮説2を部分的に支持するものであり、仕事と家庭のうち、性役割として伝統的に結びついていないものに対して接近動作をとることで、性役割が平等主義的になることを示唆しているが、女性における影響についてはさらに検討する必要がある。また、自己認知と性役割態度それぞれにおいて潜在測定および顕在測定の両方を行い検討する必要がある。

(3) マインドセット

熟慮マインドセット・実行マインドセットのプライミングが外界の認知、そして行動方略に及ぼす影響を検討した。熟慮マインドセットは、何かしらの判断や決断を下す前のような熟慮的に選択肢を吟味している心的状態とされ、様々な事態を考慮して慎重になりやすいと考えられている。一方、実行マインドセットは、決断を下した後のような、決定した計画を確実に実行していく心的状態と考えられており、積極的に行動を起こしやすいと考えられている。

マインドセットプライミングが外界の認知に及ぼす影響

熟慮・実行マインドセットのプライミングが重要性の認知に及ぼす影響を検討した。熟慮マインドセットは実行マインドセットよりも、行動目標やそれを達成する手段の良し悪しについて熟慮することを促進するために、重要性を高く評価するだろうという仮説を設けた。個人差特性として、熟慮的な判断のしやすさ(認知欲求)の個人差の影響も検討した。認知欲求尺度に回答していた大学生が参加者であった。熟慮マインドセット条件の参加者は、「現在、なかなか決められない事柄」を1つ挙げ、「それを行なった場合と、行わなかった場合の良い面、悪い面の両方」を記述した。実行マインドセット条件の参加者は、「向こう6カ月以内に達成しようとしている目標や予定」を1つ挙げ、「それを実行するための計画」を5つのステップで記述した。従属変数として、活動の日

標の重要さ vs. 目標を達成するための手段の重要性を評定させた (例: 大学の就職活動への支援 (目標) の重要さ vs. そのための講習会 (手段) への予算の分配)。結果として、手段の重要性について違いは見られなかったが、目標の重要性については、熟慮マインドセット条件は実行マインドセット条件よりも重要性を高く評価していた。さらに、この結果は認知欲求の高い参加者において顕著であった。これらの結果は、仮説と一致するものであるが、目標の重要性評価においてのみ違いが見られたことは、熟慮マインドセットが特に目標を吟味する心的状態であることを示唆すると考えられる。

マインドセットプライミングが行動方略に及ぼす影響

熟慮-実行マインドセットプライミングによって、リスクを避けるような慎重な行動や、リスクを負ってでも獲得できる可能性を高めるような行動が選択されやすくなるかを検討した。熟慮マインドセットでは、リスクを避けるような行動が選択されやすく、実行マインドセットでは獲得可能性を高めるような行動が選択されやすくなるだろうと仮説を立てて、男子大学生を参加者として実験を実施した。参加者は PC の画面に呈示されるカタカナの無意味綴り 25 語記憶するよう教示された。次に、妨害課題として、重要性の評価の実験で用いたものと同じ、熟慮-実行マインドセットプライミングの操作を行った。最後に、再認課題として、呈示された 25 語に新規語 25 語を加えた 50 語を呈示し、最初に記憶した単語か否かの判断をボタン押しで行なわせた。判断のためのボタンは 1 つで、記憶した単語であると判断した場合には押しで反応し、記憶した単語ではないと判断した場合には押さずにスルーするという形式だった。判断に確信が持てない場合において、積極的に行動を起こすか否かがボタンを押す頻度として測定され、そのような行動はリスクを負ってでも獲得を目指す心的状態のときには増加すると考えられる。結果として、認知欲求の高い参加者において、実行マインドセットのほうが熟慮マインドセットよりもボタンを押す頻度が有意に多いことが示された。この結果は、熟慮マインドセットよりも、実行マインドセットのほうが積極的にリスクを負ってでも行動する傾向にあることを示唆する。

一連の研究により、マインドセットのプライミングによって外界の認知を変化させ、行動方略に影響を及ぼすことが示された。これらの結果は、認知と行動がセットになっており、マインドセットプライミングはそのセットを活性化する操作であるという考えを支持するものであった。

(4) 理論的検討

上記一連の研究を踏まえて、理論的検討をおこなった。実証研究で示された知見を説明できるモデルとして、マインドセット研究で

示されたように、プライミングによってある表象が活性化すると、その状態に適したようなマインドセットが形成され、それにともない、自己・他者・環境・運動系の全ての表象が特定のパターンに収斂し、それらの表象の相互作用の結果として行動が変容するといったモデルがより妥当であることが考えられる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3 件)

1. 沼崎誠 (in press). 異性愛と社会的認知および社会的行動の性差. 心理学評論, 60. (査読あり)
2. 沼崎誠・松崎圭佑・埴田健司 (2016). 持つものの柔らかさ・硬さによって生じる皮膚感覚が対人認知と自己認知に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 55, 119-129. doi: 10.2130/jjesp.s11-4 (査読あり)
3. 高林久美子・沼崎誠 (2016). 重要他者からのジェンダー・ステレオタイプの期待と性役割観が女性の自己ステレオタイプ化に及ぼす効果 明治大学心理社会学研究, 11, 113-124. (査読なし)

[学会発表](計 22 件)

1. Matsuzaki, K., & Numazaki, M. (2017). The effect of body postures, the presence of others watching, and individual differences on implicit self-esteem. Presented poster at The 2nd International Convention of Psychological Science, Vienna, Austria.
2. 沼崎誠・森川健太・松崎圭佑 (2016). 達成目標プライムが遂行に及ぼす効果を自己注目が調整するか 日本社会心理学会第 57 回大会 (関西学院大学, 兵庫県西宮市) 発表論文集, 201.
3. 森川健太・沼崎誠 (2016). 首の動きはプライミング効果を調整するか? 日本社会心理学会第 57 回大会 (関西学院大学, 兵庫県西宮市) 発表論文集, 208.
4. 松崎圭佑・沼崎誠 (2016). 熟慮-実行マインドセットが方略選択に及ぼす影響 日本社会心理学会第 57 回大会 (関西学院大学, 兵庫県西宮市) 発表論文集, 318.
5. 埴田健司 (2016). 仕事・家庭への接近・回避動作が潜在的自己認知と性役割態度に及ぼす影響 日本社会心理学会第 57 回大会 (関西学院大学, 兵庫県西宮市) 発表論文集, 120.
6. Numazaki, M., & Matsuzaki, K. (2016). Does benevolent sexism moderate the effect of power posing on self-esteem for women? Presented poster at The 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.
7. Morikawa, K., & Numazaki, M. (2016). Does overt head movement validate priming effect on person perception? Presented poster at The 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.

8. Matsuzaki, K., & Numazaki, M. (2016). Does mindset priming affect the use of strategies in a signal detection task? Presented poster at The 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.
9. 松崎圭佑・沼崎誠 (2015). マインドセットプライミングが方略選択に及ぼす影響 日本社会心理学会第 56 回大会(東京女子大学, 東京都杉並区) 発表論文集, 142.
10. 八野井彰・沼崎誠 (2015). 感染脅威と感染予防行動が国産・外国産製品の購買意欲に及ぼす影響 日本社会心理学会第 56 回大会(東京女子大学, 東京都杉並区) 発表論文集, 138.
11. 沼崎誠 (2015). 異性愛の顕現性と行動の性差 - 基盤とプロセス - シンポジウム「行動におけるジェンダー差の起源」 話題提供者 日本心理学会第 79 回大会(名古屋国際会議場, 愛知県名古屋市) 発表論文集, SS(41).
12. Matsuzaki, K., & Numazaki, M. (2015). Do deliberative and implemental mindsets influence perception of importance? Presented poster at The 16th annual Society of Personality and Social Psychology conference, Long Beach, USA.
13. 沼崎誠 (2014). 身体動作や姿勢や身体感覚が外界や自己の判断に及ぼす効果 - 調整要因の検討 - シンポジウム「Embodied mind: 身体状態のモニタリングから生まれる世界像」 話題提供者 日本心理学会第 78 回大会(同志社大学, 京都府京都市) 発表論文集, SS(2).
14. 沼崎誠・埴田健司 (2014). 恋人概念の閾下プライムが男性のジェンダー関連自己ステレオタイプ化に及ぼす効果 日本心理学会第 78 回大会(同志社大学, 京都府京都市) 発表論文集, 169.
15. 沼崎誠・松崎圭佑 (2014). 恋人概念の閾下プライムが決断力や好みに及ぼす効果 日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会(東洋大学, 東京都文京区) 発表論文集, 48-49.
16. 沼崎誠・松崎圭佑・埴田健司・平間一樹 (2014). 恋人概念の閾下プライムが自己ステレオタイプ化と身体的力強さ行動に及ぼす効果 日本社会心理学会第 55 回大会(北海道大学, 北海道札幌市) 発表論文集, 3.
17. 落合春一・沼崎誠 (2014). 姿勢の上下と目の有無が自尊感情に及ぼす影響について 日本社会心理学会第 55 回大会(北海道大学, 北海道札幌市) 発表論文集, 136.
18. 石井国雄・沼崎誠・田戸岡好香 (2014). ピンクの衣服がジェンダー関連の自己認知と態度に及ぼす影響(1) 日本社会心理学会第 55 回大会(北海道大学, 北海道札幌市) 発表論文集, 149.
19. 田戸岡好香・石井国雄・沼崎誠 (2014). ピンクの衣服がジェンダー関連の自己認知と態度に及ぼす影響(2) 日本社会心理学会第 55 回大会(北海道大学, 北海道札幌市) 発表論文集, 150.
20. 松崎圭佑・沼崎誠 (2014). マインドセットプライミングが重要性認知に及ぼす影響 日本社会心理学会第 55 回大会(北海道大学, 北海道札幌市) 発表論文集, 155.
21. 中島一稀・落合春一・沼崎誠 (2014). 姿勢の上下と目の有無が説得力判断での自信に及ぼす影響 日本社会心理学会第 55 回大会(北海道大学, 北海道札幌市) 発表論文集, 265.
22. 沼崎誠・石井国雄・松崎圭佑・埴田健司・田戸岡好香 (2013). 硬さ/柔らかさの触覚が対人認知に及ぼす効果 日本社会心理学会第 54 回大会(沖縄国際大学, 沖縄県宜野湾市) 発表論文集, 85.

〔図書〕(計 2 件)

- 沼崎誠 (2014). 集団間関係 「新版 誠信心理学事典」 誠信書房, 266-269.
- 沼崎誠 (2014). 進化的アプローチ 唐沢かおり(編)「新社会心理学」 北大路書房, 149-168.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沼崎 誠 (NUMAZAKI MAKOTO)
 首都大学東京・人文科学研究科・教授
 研究者番号: 10228273

(2) 研究協力者

天野 陽一 (AMANO YOICHI)
 首都大学東京・人文科学研究科・助教
 研究者番号: 90571886

石井 国雄 (ISHII KUNIO)
 清泉女学院大学・人間学部・専任講師
 研究者番号: 40705208

埴田 健司 (HANITA KENJI)
 東京未来大学・モチベーション行動科学部・講師
 研究者番号: 90757535

田戸岡 好香 (TADO'OKA YOSHIKA)
 長野県短期大学・多文化コミュニケーション学科・助教
 研究者番号: 10794018

高林 久美子 (TAKABAYASHI KUMIKO)
 東京女子大学・人間科学研究科・特別研究員
 研究者番号: 70804516

松崎 圭佑 (MATSUZAKI KEISUKE)
 首都大学東京・人文科学研究科・D3